

國學院大學學術情報リポジトリ

2016年度のトピック1

国際研究フォーラム「東アジアのグローバル化と宗教文化」SISR2017準備

東アジア国際ワークショップ「東アジアのグローバル化と宗教文化」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 星野, 靖二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001905

国際研究フォーラム「東アジアのグローバル化と宗教文化」 SISR2017準備 東アジア国際ワークショップ「東アジアのグローバル化と宗教文化」

2016年10月16日に、日本文化研究所の主催で国際研究フォーラム「東アジアのグローバル化と宗教文化」が開催された。その前日15日に行われた同題の東アジア国際ワークショップと連続した企画となる。以下合わせて内容を紹介する。

東アジア国際ワークショップ

10月15日の10時から18時にかけて、日本文化研究所と日本学術振興会科学研究費基盤研究B（海外学術調査）「アジアの政教関係と新しい公共宗教論構築の地域比較研究」（課題番号16H05712、研究代表者：櫻井義秀）が主催し、「宗教と社会」学会の後援を得て、「SISR2017準備 東アジア国際ワークショップ 東アジアのグローバル化と宗教文化」が開催された。本ワークショップは、もともと国際宗教社会学会（SISR）が2017年夏にメルボルンで学術大会を行う予定となっていたことを受け（その後同学術大会はスイスのローザンヌにて開催されることになった）、その準備のために企画されたものである。広く東アジアの若手研究者・大学院生に参加を呼びかけて発表者を募り、英語での研究発表・議論を行った。

ワークショップは、それぞれ「東アジアの社会参加型宗教・公共宗教」、「東アジアの宗教文化・宗教文化教育」、「東アジアの宗教運動・政教関係」という主題を持つ三つのセッションによって行われた。以下、概要を示す。

Session 1: Religious Engagement and

Religious Actions in Public Sphere

Chair: Yoshihide Sakurai [Hokkaido University]

- 1) Aki Uchida [Tsukuba University] “A Case Study of a Japanese Rural Temple Actively Involved in Social Activities”
- 2) Koki Shimizu [Hokkaido University] “Influence of Secularization on Subjective Well-being in Japan: Secondary Analysis of ‘Japanese Consciousness Survey’ Conducted by NHK”
- 3) Siyoon Lee [Sogang University] “Buddhist, Environmental Movement, Religious Movement and South Korea”
- 4) Francis Lim [Nanyang Technological University] “Beyond Civil Society: Spiritual Empowerment, Work, and Social Engagement in China”

Session 2: Religious Culture and Education of Religious Studies

Chair: Kikuko Hirafuji [Kokugakuin University]

- 1) Aki Murakami [Tsukuba University] “How can an oracle become a public affair?: The case of study of Oshira-sama shrine in the Tsugaru area”
- 2) Shiho Toishiba [Tsukuba University] “Bosogaku: Praying for Prosperity in Modernizing Japan”
- 3) Chae Young Kim [Sogang University] “Religious Education and Related

Problematic Issues in current Korean Elementary-Secondary Schools and Beyond”

- 4) Yoshihide Sakurai [Hokkaido University]
“University Education of Religious Diversity and Problematic Issues”

Session 3: New Religious Movement and Politico-Religious Relations

Chair: Nobutaka Inoue [Kokugakuin University]

- 1) NG, Ka Shing [Hokkaido University]
“Localism and Christianity after Umbrella Movement: Growth of ‘Localist’ Churches in Hong Kong”
- 2) Tadaatsu Tajima [Tenshi University]
“Seeking for the ‘Safe Living Land’ for the Dead among the Urban Migrants in Japan: from the research study of the Nishiamuro village grave yard in 2016”
- 3) Yohei Fujino [Hokkaido University] “The Taiwanese Church and the Taiwan Independence Movement: Recent Tendency and the Context of After WW2 in Taiwan”
- 4) Yu Shuang Yao [Fo Guang University]
“Christianity as Model and Analogue in the Formation of ‘Humanistic’ Buddhism”

(*上記の発表題目はプログラム記載のもの)



ワークショップ会場の様子

翌日の国際研究フォーラムの登壇者にもオブザーバーとして参加してもらい、30名を越す参加者を得た。このワークショップにおいて充実した議論が行われただけでなく、参加者間の交流を促進したこと、またその後多くの発表者がローザンヌ大会に参加したことなどもあり、様々な意味で意義のあったワークショップとなった。なお、これらの発表について、2017年度に内容をまとめて成果として刊行する予定である。



ワークショップ質疑応答の様子

国際研究フォーラム

10月16日午後に、日本文化研究所の主催で国際研究フォーラム「東アジアのグローバル化と宗教文化」が開催された。本フォーラムでは、東アジアという地域に焦点を合わせ、グローバル化によってどのような宗教問題が顕在化したか、また人々の宗教に対する意識がどのように変化したのかといった事柄を検討することを目指した。日本、台湾、中国などを主要な研究対象として、そこにおける宗教をめぐる現代的状況について検討している研究者4名に報告をお願いし、その後岩井洋氏（帝塚山大学学長）によるコメントを受けて総合討議を行った。なお、司会は櫻井義秀氏（北海道大学教授）をお願いした。以下、内容を紹介する。

報告 (1)「中国共産党の宗教政策とグローバル展開」川田進氏 (大阪工業大学教授)

川田氏は、まず中国共産党の宗教政策を概観し、文化大革命後に宗教に積極的な意義を見出して活用していこうとする方向性が見られるとし、いわば「マルクス主義宗教観の中国化」が進行しつつあるとした。現在、党は五つの宗教を公認して管理しつつ、宗教組織と交渉し、味方に付けて統一戦線を構築しようとしており、例えば習近平はシルクロード経済圏構想の実現に向けて、宗教界を活用しようとしていると指摘した。一般にチベット仏教については、チベット亡命政府と中国政府の対立状況に焦点が合わせられる傾向があるが、社会主義社会に対応して党と協力関係を築いている高僧の例として、四川省ラルン五明仏学院のケンポ・ソダジの活動を紹介した。他方で、青海省コンヤブ寺の高僧ケンポ・カルツェについては、党に協力しつつ妥協しない姿勢を取ったが、チベット人の権利擁護を主張した後に公安当局に拘束されたと述べた。



川田 進氏

報告 (2)「日本の若者は宗教をどう見ているのかー20年にわたる意識調査をてがかりに一」井上順孝氏 (日本文化研究所所長)

井上氏は、現代の日本の若者がどのように

宗教を見ているかを、実態調査に基づいて検討してみたいとして、まず1995年から2015年まで12回に渡って行われた学生宗教意識調査についてその概要を紹介した。例えば神棚や仏壇の設置率にはやや減少傾向が見られるのに対して、初詣や墓参の実施率についてはわずかながら増加傾向が見られるなど様々な分析結果を紹介し、イスラームについての関心の推移にも触れ、更にオウム真理教について20年間一貫して高い関心が保持されていることを指摘した。その上で、グローバル化に伴って、例えばムスリム・モスクの増加など日本社会と宗教の関わり方がこれまでとは異なる新たな局面を迎えたことを指摘し、またそうした状況において宗教情報リテラシーの涵養が重要であることを述べた上で、2011年に設立された宗教文化教育推進センターとその活動を紹介し、またその試みが日本を越えて行われていくべきではないかと述べた。



井上 順孝氏

報告 (3) "Religious "Modernization" and Challenge in Post-war Taiwan" Wei-hsian Chi氏 (Academia Sinica, Taiwan)

Chi氏はまず、戦後台湾の宗教をめぐる基本的な状況を概観して以下の三点を指摘した。即ち第一に、大陸から渡来した仏教が台湾社会における「仏教」理解を作り替えたこ

と、第二に西洋から渡来した様々なキリスト教が、競い合いながら活発な宣教活動を行っていること、第三に1970年代以降、民俗宗教が盛んに行われるようになったことである。その上で、台湾における宗教は近代化に伴う社会変動にどのように対応すべきかを模索しており、特に1990年代後半以降、以下の三点が特徴的に見られるようになってきているとする。即ち第一に、宗教組織は社会的な可視性をより意識するようになり、自らの社会の中における機能、役割を自覚的に検討するようになった。第二に、スピリチュアル・ケアがより盛んに、かつ多様な形で宗教的活動として行われるようになった。第三に、宗教のメディア化であり、メディアが宗教的なコミュニケーションを変容させただけでなく、既にメディアは宗教の一部となっている。そして、このような変化はまた、どこまでが「宗教」であるのかという問いを投げかけているとした。



Wei-hsian Chi氏

報告 (4) "Changes in the Chinese Religious Landscape since 1999"
Benjamin Penny 氏 (Australian National University, Australia)

Penny氏は、まず現在の中華人民共和国における宗教状況について、中国共産党が社会調和の維持やその発展における宗教の意義を

承認し、その活用を検討していることを指摘し、他方で外国からの影響の排除などを念頭に置いて、宗教組織に対する指導・管理を強めているとした。例えば、法制度上の変化に触れた上で、ある宗教組織を邪教として非合法化する権利を党が保持しているとし、法輪功など幾つかの組織を紹介した。続けて、イスラーム、チベット仏教、カトリック、プロテスタントの現況を概観し、それぞれ隆盛していると同時に、その脅威を認識している党による介入も見られるとした。最後に新しい傾向として、より社会参加を重視する仏教が台湾からもたらされたこと、また養生法のような世俗化された宗教実践が熱狂的に支持されていること、更に易や中国医学などの伝統的であると自己提示する諸実践が大衆化して広く行われていることなどが紹介された。



Benjamin Penny氏

全体を通して、「東アジア」という文脈を、その中での違いにも目を向けながら、きちんと考えていく必要と同時に、「情報化」のもたらす影響やそれに伴う諸問題、またそれらにどのように対処していくかを検討していかなければならないことなどが議論され、今後も研究交流・意見交換を続けていくことの重要性が了解された。最終的に、百名ほどの参加者を得て、充実したフォーラムとなった。なお、この成果も2017年度中にまとめて刊行する予定である。(星野靖二)